

改悔文徹心鈔

全

特36

71

017526-000-9

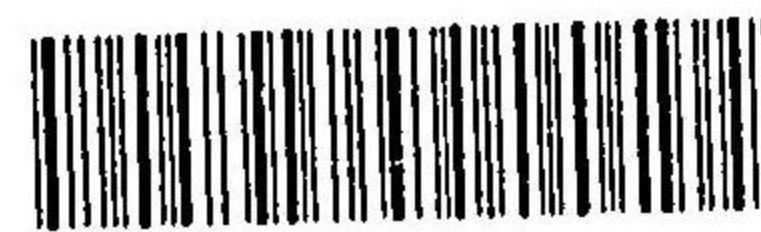
特36-71

改悔文徹心鈔

劉貞諒/著

M15.10

ABF-0311



館  
函  
架  
號

大日本圖書會館

一	八	一
冊	七	七
號	號	函
	四	
	架	

※※※※※



權大講義勸貞諒著述

改悔文徹心鈔

由蓮社藏版

改悔文 徹心鈔序

夫全國ノ秋ハ一葉落ニ始マリ大洋ノ鹹味ハ一滴水ヲ出テス我真宗ノ教法ハ遠ク弥陀ノ因源果海ニ興リ十方佛ノ皆共讚嘆ニ弘マル就中釋迦此界ニ出テ、直説シ七祖之ヲ印度漢和ニ傳ヘ宗祖大師廣ク經論釋ヲ集メテ立教開宗シ給フ其文其義甚ク深ク甚ク廣シ猶大洋ノ渺且深ナルカ如シ豈一目以テ涯底ヲ究ムヘケンヤ雖然海ニ航シテ鹹味ヲ知ル能ハス弱水ヲ嘗ル者能之ヲ識此改悔文ハ所謂真宗法海ノ一滴水ヲ





改悔文 徹心鈔序

夫全國ノ秋ハ一葉落ニ始マリ大洋ノ鹹味ハ一

滴水ヲ出テス我真宗ノ教法ハ遠ク弥陀ノ因源

果海ニ興リ十方佛ノ皆共讚嘆ニ弘マル就中釋

迦此界ニ出テ、直説シ七祖之ヲ印度漢和ニ傳

へ宗祖大師廣ク經論釋ヲ集メテ立教開宗シ給

フ其文其義甚ク深ク甚ク廣シ猶大洋ノ渺且深

ナルカ如シ豈一目以テ涯底ヲ究ムヘケンヤ雖

然海ニ航シテ鹹味ヲ知ル能ハス弱水ヲ嘗ル者

能之ヲ識此改悔文ハ所謂真宗法海ノ一滴水ヲ



嘗ルモノニシテ廣博ノ言教唯一念信ヲ出テス  
若一念信ヲ獲レハヨク一切ノ法門ヲ知ルニ契  
フ今劉權大講義ノ鈔マ信徒ノ講ニ應シテ増上  
勝解ノ為文意ヲ宣述セルヲ以テ唯受信ヲ取ラ  
シムルヲ要ス者者志ヲ文字ノ間ニ止メス深ク  
願海ニイリ飽マテ法水ニ浴シ倍受信ヲ増上シテ  
彼廣大ノ恩海ヲ念報スヘシ乃是レ一葉落ヲ見  
テ天下ノ秋ヲ覺リ一滴水ヲ嘗テ大洋ノ鹹味ヲ  
知ル者トス顯シテ徹心鈔ト云不亦宜乎

明治十三年八月

講師権少教正

松山忍誠撰

改悔文徹心鈔自序

一信士謂云僕改悔文ヲ受シトキ誠云卷テ函ニ  
スル勿レ糊シテ貼スル勿レト因テ晨讀夕誦ス  
ルコト累日大意ハ解シタリト雖トモ微冲解ス  
ルアタハス爰ニ口授スル度数次累月ニシテ来  
云已教ヲ受ト雖トモ事業紛冗忘失尤多シ伏乞  
僕カ如キ者一二ニ止ラス故ニ之ヲ剗剗氏ニ付  
シテ一冊子トシ備忘トセム然則勞一二シテ功  
莫大ナリ師其之ヲ諾セヨト余曰功則功也而シ  
トモ如許サハ意ヲ文字ノ間ニ措テ胸次ニ得ル



所ナクハ何ノ詮カアラムト曰ク掃顔者則顔之徒也ト爰ニ於テ諾ス

明治十三年九月

劉貞諒識

改悔文徹心鈔

劉貞諒著述

此改悔文を解し解して先三段に分ち一は製作の意二は題名をととき三は本文を釋し一は製作の意とは此改悔文を開山大師より第十四世の堯秀上人の撰述あり此上人の浄代は安心は區の異義をなせり其時親ら之と選りて全國の門徒に教給へり而るは此文の體裁消息等も異りて門徒より善知識に向て領解と述る文體あり之より因て惑者と十四世上人の親作あり



非も門徒の中より申上る者とす此是文體の  
下より上より向つる詞あるともて斯る説と云出  
せり鄙俚の説よて學者分上の取らざる如あり  
剩へ此文の起盡何と庸人の手お出る所より  
んや二の題号改悔文とは是追の非と改めて今  
日よ里己後をよく心得ると改悔とい云なり歳  
五十お及く始て是追の心得の能からさりし事  
とよく思知るを四十九年の非を知とも云ふ  
り情考ふ世弥澆季よ及て物毎まぐ違來りて  
今其宗の流と汲ハ皆その家々の先祖の色と此

法小歸投志ある故ありありあをせとも辨へ  
寸唯輕噪は流て其上宗籍出來りしと唯其宗  
よ襲來るよ任せ更よ心より奉事するの徒あく  
それの今の世まで續き來りて善知識の教化を  
聞さる一人多うりし而るお維新已來信教自由  
の仰下りて心任せし宗教を尊崇する莫となり  
きれとも宗教の都て何なるぞ知さる人多うり  
なるか幸おこの真宗の流と汲おから宗の法則  
ともあらざる者の何多ふよりて此回改刻して  
普く之を頒布志給ふ因て今始て其教を聞て疑



と晴し自力をえて雑毒虚假の心と離き王法仁  
義の道を辨へ世出立は互りて善知識の教とは  
を背さるを改悔志きる同行とは云也是其肝  
要する所あるは之を取て各けて改悔文とは申  
あり三もを本文お入る解へ  
此改悔文一紙十二行と釋は他力の御回向と云  
より領解いき候迄の四行ハ安心領解と云此  
うへよハより心得申候迄ハ報謝の行と云かや  
うめと云より存候迄ハ相承傳持の恩と知と云  
今より後とあるよりまき候迄ハ改悔懺

悔志きる相と述給ふあり御恩有加や南无阿  
弥陀佛の句と結文にして知恩報徳の義と示し  
常恒相統の相と六字お結飯し給ふ也是則此章  
一篇の大綱なりさて初お安心と述るお自己の  
領解と舌頭は語る相として示し給ふまき候此  
改悔文の門徒一人々よる領解の相と善知識は  
申し述る詞とをりて作り給へるおれハ始より  
終迄自己心中の領解と述る事と示させらまき  
るものなりあるまき候今此文は我心中の領解と  
打出して如是ある一と教給ふ意あり



最初さいしゆ、他力たうりきの御回向ごまうかうと云ふものハ、全く自力じりきの計けい度どを離はなさざる相さうなれハ、一篇いつぺんの肝要かんやうと最此さいし一句いっく、小阿彌せうあみと御本典ごほんてんハ、謹按きんあつ淨土真宗じゆつどしんしゆ有あ二種回向にしゆまうかう一いつ往相わうさう二還相えんさう就往相回向じゆわうさうまうかう有あ眞實教行信證しんじつきやうしんじゆとの給たまひ又また御消息ごそくしハ、阿彌陀佛あみだぶつの御ちりごちりハ、法藏菩薩ほふざうがさつ我等われら小回向せうまうかう志給しあたまへると注相しゆさうの回向まうかうと申也まうせ、此外このあ回向まうかうさせ給へる願ねんと念佛往生ねんぶつじやうじやうの願ねんとハ申也まうせ、此この念佛往生ねんぶつじやうじやうの願ねん、一向いっかうハ信しんじて二心にしんあきと一向いっかう專修せんじゆとは申也まうせ、云々志しり進しんハ、この他力たうりきの御回向ごまうかうと申事まうせの信しんセら進しんぬうちハ、雜行等ざうかうたうの自力じりき疑心ぎしん

とす、さらぬありそのえせまの捨すてさらぬ間まと、弥陀だいた一佛いつぶつハ、任まかしを意いは起おこらぬれり、食くして惡敷物あくしきものと小兒せうにの持もち多おほ敷しよとれと、とらんとする時ときと、それよとほきり、くもの物ものと、其そのへぬも手てハ、放はなすぬれり、今いま雜毒ざうどく虚假こけの善ぜん小せうなれて、佛智ぶつち不思議ふしぎの名願なまねん力りきと志しりさる者ひとふと、この超世しやうせいの願ねんと我等われらの為ためハ、御回向ごまうかうなされと、無上むじやうの願ねん力りきあると、度どを聞きて、非本願ひほんねんの諸行しよかうと、まて疑うたがはれて、これを我等われらの成な佛ぶつの正固しやうこと信しんずる時とき、自力じりきのえせ物ものとす、て、他た力りきと、あれも、ゆるり、其その為ためハ、眞最初しんさいしゆハ、他力たうりきの



御回向ごかいこうよよアとてお出いして見みせ給たまふあり御回  
向かいこうと云いふ其體そのたい本願ほんがんなり他物たぶつはあり寸固すんこて上  
の勸章くわんしょうの次つぎは如來にょらい二種にしゆの回向かいこうと申まをすハこの二  
種の回向かいこう此願このがんを信しん一ひと二心にこころなきは眞實しんじつの信心しんじんと  
申まをすと仰おほらむとさり自力じりきの回向かいこうハあらざる故ゆゑハ  
他力たうりきの御回向ごかいこうとの給たまへるなり他力たうりきと云いふ如來にょらい  
の本願ほんがん力りき也なりとあきハ憑たもむ一ひときハ本願ほんがん力りきより外  
とありと也なり雜行ざうぎやう雜修ざうしゆとは和讚わさんハ一ひときハ  
つよ阿あらぬとも雜行ざうぎやう雜修ざうしゆこれ似にあり淨土じやうどの行ぎやう  
ハあらぬとも一ひとハ雜行ざうぎやうと名なけ一ひとむと阿あり

て雜行ざうぎやうとは正行せうぎやうハ對たいする詞ことば也なりこの正行せうぎやうハ五種ごしゆ  
阿あ里り之のお返かへして又また五種ごしゆの雜行ざうぎやうあり此この二行にぎやうハ元もと  
選せん択たく集じふ云い夫そ速すみ欲よく離り生死しじふ二種にしゆ勝法しやうぽう中ちゆう且かつ閣かく聖道せいどう門もん  
選せん入に淨土じやうど門もん欲よく入に淨土じやうど門もん正せう雜ざう二行にぎやう中ちゆう且かつ抛な諸しよ雜行ざうぎやう  
選せん應おう皈へい正行せうぎやう欲よく修しゆ於お正行せうぎやう正せう助じゆ二業にぎやう中ちゆう猶なほ傍はう於お助業じゆぎやう  
選せん應おう專せん正定せうてい正定せうてい之の業ぎやう者しや即すなは是なり稱しょう佛ぶつ名な稱しょう名な必かなら得ず生ま  
依よ仙せん本願ほんがん故ゆゑ云い云い此この正行せうぎやう五種ごしゆとハ一ひと讀よ誦じゆ正  
行ぎやう二に觀くわん察さつ正行せうぎやう三さん礼らい拜はい正行せうぎやう四し稱しょう名な正行せうぎやう五ご讚さん歎たん供  
養ぎやう正行せうぎやう也なり讀よ誦じゆ正行せうぎやうとハ經きやうと讀よとありと三  
部ぶ經きやうとのよむ一ひと二に觀くわん察さつとハ極樂ごくらくの莊嚴じやうげんと



のこころは思浮へて他は心と修さけり也三礼拝  
とは弥陀一佛とのと拝むあり外は四は称名正行  
とは弥陀の名號とのと称へて他の佛菩薩の名  
をとなくさる也五は讚歎供養といは弥陀一佛  
とほめ奉て或は香華灯明等と供養する是と讚  
歎供養と云れりこの五正行と又分て二と寸一  
は正業二は助業正業といは第四の称名正行  
と本と一外の前三と後一とと助業として正業  
はあらすともこの正助二を除く外は皆雜行  
あり之は就て五種雜行あり一誦誦雜行といは三

部經と除て外の地藏觀音等の經ハ中及ハ  
一切の經と誦誦せると誦誦雜行と云二觀察雜  
行といは極樂の莊嚴と除て餘の大小乘事理の觀  
法とあまを觀察雜行と云三礼拝雜行といは弥陀  
と礼拝すると除て餘は佛菩薩及諸の世天等と礼  
拝すると礼拝雜行と云四称名雜行といは上の如  
く弥陀の名号と称あると除て外の佛菩薩并  
諸の世天等の名号と称あると称名雜行と云五  
讚歎供養雜行といは弥陀如來と除て外の一切の  
佛菩薩并諸の世天等と讚歎供養すると悉く讚



歎供養雜行と名るなり此外にも布施持戒等の  
無量の行あり皆この雜行の詞の中おねさする  
られと雜行と云也雜修とは上お云如く五正行  
の中お茅四の稱名の一行と正定業と一前の読  
誦等の三と茅五の讚歎供養との四正行とハ助  
業とす助業とい稱名の助とありて經とよむよ  
を極楽と思おも弥陀と拝むおも之ときより  
とて念佛申す故ハ助けとある如より助業と  
は云あり正業はあらも而もと稱名を誦誦も  
礼拝も共ハ西行おきとて淨土の因とねもひ

正助のワウちれく修すると雜修とは云也その  
助正とありつて修まとい助業とも往生の行と  
心得てなまをとあらつて修まとい云也それお付  
てと稱名するおも往生の業とあてつてつ  
とむるときハ專修雜心とて自力の念佛となる  
なり仍て宗門の意と機の能修は付て自力の心  
とえ何るときらハ光明大師の雜修は十三の失  
といまむその中佛恩と念報せさるか故もと  
の給ふとの能修の心は自力あるときらハる意  
因て和讚ハ助正あらつて修まるとハ即雜修と



名けり一心と得ざる人あれハ佛恩報する心  
ありとの給り尚亦その不至心者の志るに  
とありき事ワさしひ阿る時々平生変定心有り  
と見ゆる人も俄小祈と志り此世の福寿と貪  
る意有と修雜不至心者あまハ專修の行者とい  
へとも心と雜心故又讚ハ佛號むねと修すま  
とも現世といのる行者といこれハ雜修と名け  
てそ千中無一とさらさぬと示し給ふれり此  
雜行雜修と自力往生の部類みて愁りてハ  
土小生るく度をも甚かかこハ已ハ千中無一と教

給つアまき世お多からんと思ふと現世の福壽  
といのる者あり人生と悉く前定あるをの故ハ  
貪て得らる者よとあらされい志りハ百即百  
生の誓願不思議と信し唯称佛名離自力心安堵  
よ住して往生安樂の素懐ととくつき也依て今  
雜行雜修の千中無一の行とまづつハ示し給  
ふあり

疑心自力とまきとは是皆捨つつき者の限也  
疑心とハうをうひあり此疑ハ大小有りて大と  
疑といひ小と慮と云この二と合して疑心と云



自カハはるるて雅行已下疑心迫る自カの心ある  
ゆへ也因て捨つべき物の終りも自カと捨りる  
る意あり疑ハ信の裏めて竜樹菩薩と疑則華不  
開信心清浄則華開見佛との給ふ吾祖大師一代  
の教化と勸信誠疑よりて更は外あり元祖と生  
死家疑為所止涅槃城信為能入と示し給ひて通  
佛法の時と煩惱と断して菩提と證る因て聖道  
門より断惑證理ときて真宗は勸信誠疑と云  
弥陀因位の上りて云はを疑と本願あり果  
上りていはは佛智と信して疑を寸一心皈命の

立地は無明の闇暗佛智佛願の不思議と信する  
とき無始の重障消滅して即得往生の巨益を得  
奉る是と无疑无慮乘彼願力定得往生とは給  
へて之と信せしむらして断惑證理の定散心  
交るか故も今迫往生もことごとくつき故に疑  
を棄てるとやく本願と心のむへりとすめ給へ  
る意あり仍て今己の心とあてよきる自カとま  
つきてされを報土往生の身とはあるへうす  
その自カと捨る方術をまづ他カと聞さむる自  
己の心と生のむ定散心を止さるぬりされを云



成就の文は聞其名号といひ三十行の偈も  
聞名歎往生ととき經の初は我聞如是と云  
ひ終に聞佛所說靡不歡喜とよく皆是願力と聞  
の外あり

阿彌陀如来後生御助け候へとは是行者の飯  
命も相今應墮地獄の我等曾無一善の身當り  
今斃んとする時誰と憑んてあ後世の苦と免  
ん何小依てか佛果の樂地はいあらむ唯三惡火  
坑臨々欲入より外ありこの時本願名号のいた  
まるときかともよも左右と顧て猶豫まへらんや是

と曇鸞大師は無後心無間心との給ふ平生の時  
此心に住してひとある小弥陀とをのみ奉る一  
念の時心と往生間違をさぬの誓願の地はわら  
むやがて攝取不捨の心光をもて放ち捨給をぬ  
ゆへ小即の時往生定ると即得往生住不退轉と  
説給へりかゝる廣大無尋の利益在る佛あり故  
阿彌陀と云名もつき給へる也唯此願意に任ま  
思ひありとすと御助け候へといの給へるれり此  
一句と南无阿彌陀佛の六字あり後生御助け候へ  
ハ南无の二字あり助け給へと云御助け候へと



いふも意は同一其故と色と南无と梵音華子度  
我と云時と我と度一給へと云也度と云はと  
いふ字生死の海と云とすと云意今とこの度我  
の意よて御助候へと遊まゝ也去るも子吾  
祖大師の御意よと色を此度我の義と元より何  
まこと皈命釋と見まを命と仰子釋一給ふ命と  
は至心信樂救生の如來の三信ありそれ子隨ふ  
と皈と云也その隨ふ方と加ろく命とたも一重  
き方の命よより命は隨ふと皈命と云おまを御  
助候へと詞ありて意ハ命をかりあり仍て佛力

よ任せもてとる知と御助候へとこの給意と解を  
そののみ奉る最初の一念よとはこのまのみと云  
と御助候への心をそののみ奉るとの給ふなりさ  
れも最初の一念と云も外お何もあはま後生  
御助候へあり上の句の終おとの字何るこれ一  
念の更ととと定めて云詞ありまのむと云言と  
まみむめと四段お活く詞ありてどの段よても  
まぶくまのむと云ハワの身のカと成知とまの  
むと云也此のまみむめは縁と云事初心の人も  
まの時のまのむのめと活くあり初心のまの  
と云時と未だ段のめと活く云時と縁言段のむ







心持と領解の候と云あり領納と  
も有りて字書は受也と云心は受得もを領  
と云其旨と心は得されハ解ことありか今  
他力よりて往生一定の旨と心は受て始て明  
小解と云ると領解といつる也我等といふその  
旨と受得しき者として我等と云往生とい  
即ち往て安樂世界ハ生ると往生と云出うけ  
て往て此身の果報の盡る時ちれ共もちや一念  
変定し生る時生る其の定ると変定とハ申也  
こゝに心得違ふる人もあるハこれハ能々心と

潜めて思ふ一きの変定と領解の候と云  
ハ変定といふとの字のち定まる詞あると思  
違つる人の實は本真ハ変定ハ出来ぬを無理  
よアきこて変定とまじひつゝる様ハ思つ  
は甚くこゝからず変定のならぬ者と志めて変  
定とれりやあらずのみ奉る最初ハ聞て始  
めて佛力の方ハ疑のれらされハ聞居る間ハ  
誓願の御約束の志と志らば一時我身ハ高  
く後世の重荷の下に様ハ軽くなり死始己  
来の初夏ハ安堵の思出来る時と変定と心安ら



あにうつくしく信せらむる如と云詞ありと  
志ありしごとく追て安心領解ハまみこるれり  
此上ハ命終までの念佛と御恩報謝と心得申  
候とハこれより称名報恩の義と速給ふ心あり  
以上とは安心變得しむるう一と此上と云命終  
までの念佛とは畢命為期の時まで称名念佛し  
て佛恩報盡すると命畢る迄の念佛と御恩報謝  
と心得て申すへき事と云形り是又上盡一形の  
意より皈命の一念に延ひゆくと云也之と鸞師  
と心々相統他相無間雜との給ふ報恩の思より

外あるへららず是吾開山大師の小經言一心者  
二行無雜故言一也との給へる意也  
かやう小聽聞申わけ候ことハ等とは己下ハ相  
承傳持の師恩と述る一段也總て佛法と相承と尊  
ぶあり因て開山大師を爰思禿釋親鸞慶哉西蕃  
月氏聖典東夏日域師釋難遇今得遇難聞已得聞  
敬信真宗教行證特知如来恩德深斯以慶所聞嘆  
所獲矣との給へる遠く三經七祖の相承と重ト  
てかくハの給ふ也さて初まかやうふとハ俗言  
まこの通と云意聽聞申分候更とハ雜行とまう



るは正行の何らざる故に雑行とすつるなり専  
修のあふざるゆへ雑修もまつる也信をれを往  
生定寸疑へを往生遂べり寸疑と生死の因  
信と涅槃の因迷悟こころ小係るゆへ小疑を離る  
教也自力ハ往生せず他力を往生と得往生の得  
否よかゝる故小自力ハ捨て他力ハ憑むべしと  
よく聞分け候やう小御教化下さまじとるか様  
小聴聞申分候事との給ふ所り  
御開山聖人次第御相承今日御出世の善知識の  
御恩と有かごとく存候といはれり御開山とは

一山一字と開闢せらるると開山と云即我大師高田  
山と開き専修寺と草創し給ふ大師御歳五十四  
歳嘉禄二年落成して勅額と専修阿弥陀寺と下  
し給ひ勅願所の繪肯と嘉禄二年二月賜ふに永く  
真宗の本基とし給ふ因て世に稱して御開山聖  
人といは申し志也其年より星霜七年の間自ら専  
修寺の住職とありて在し志而るに御歳六十歳  
酒授直第の真佛上人ニ住職と譲り給ふ時貞永  
辰正月十五日印信状曰高田専修寺住持職親  
信状等奉傳委之印信状曰高田専修寺住持職親  
鸞位讓真佛房畢向後予門弟等以真佛可仰親鸞



者也御諱花押是まれち弟二祖也そまより頭  
智専空と次第して附法相承悔いままをり此と  
今次弟御相承と申也今日御出世の善知識と  
ハ目今世一世の善知識に當るあり御恩とは開  
山大師と始めとして馮瓶相承何らせらる善  
知識今日世に出世せし善知識迄の知識傳持の  
鴻恩と有りこゝと安心受得の上にお思へると存  
候とは申也  
いまより後善知識より定め示さる趣をむき  
申さぬやうに等これよりハ改悔の相と述るま

とあり給ふなり今より後とハ今とはかく安心  
変定去て佛恩の不行とつと免相承の師恩と辨  
する極まなりて前非と悔は是迄のまらまら法  
義まらづきこゝとけみありと氣の付初め  
ころ時と今とさし給ふ也より後とをこまより  
行先のまらて今日心附せれハ明日のまらより  
後と云是改悔の本意なり此一段の改悔文の改  
悔の相也善知識よりとハ上にお我等とあるは弟  
子なり今善知識とあるは師匠あり是師資の義  
と示し給ふありその師とる善知識より安心



門のみならず寸助法門まで御教化をささるるとす  
つく定示さるる趣との給ふありこれ所謂真  
俗二諦と云ふの也元來此改悔文と今度の宗規  
綱領より通真宗安心の正紗よて門徒の中飯  
散式と受る時此旨と能々心得ある後小剃度  
の式成ゆるさるる譯故師資の授受もあかくて  
契とぬ改悔文を此度改剃頒布し及ませら  
まざる也真宗の門徒も者此義心得むハ何  
づらび剃度の式ハ受り共未領解るてハ青  
楓と指て紅葉と云が如く名實相違をるが故也

さて此定示さるる趣と詞のみと見て何と指度  
あらんと思ふべけれ其上の善知識よりと云詞  
と心よ置へ一宗一派の化導ハ善知識御一人  
小阿里是他あり開山大師より相承の趣も本山  
善知識唯御獨ありそれ故安心惑乱あど有時  
其變断ふさるる他人もてハならぬ也世出世  
の事共其指麾と仰くハ善知識の御上あせむ  
唯善知識より定示さるる趣との給へ也定免と  
云と一定も品と定免と云示まとは事と一定  
て後教命一給出ると定免示まとの給へ也是則



其示諭し給ふ事柄と真諦俗諦の外とあきなり  
 その二諦と云ふ安心立命と王法仁義より外に  
 ありたりふも今と改悔文にて安心の一途と出  
 して今迄正信と得ざる者の佛智佛願に契をさ  
 る心底と改め實に願意に契當する時善知識の  
 教化を初て信する姿と述んとする意也仍て文  
 面は真諦の安心のみ此やうに聞ゆまとも定  
 示さる御詞の中は皆籠りてある也  
 とむき申さぬやうにせしめ申し候とむき  
 申さぬやうにおはこれ返とむきしことの知ら

きて悔ひかありみあはくと改悔の悔とは云也  
 善知識の教化をまつと背のぬ様といふは海  
 女と骨髄と志とてくやむあり上は今の  
 後と云詞と云ふして来て今より後と云ふ  
 み申さぬ事ありませうと云ふことなみ申べく  
 候の詞あり今日已後御教誡の如く心と改め安  
 心正信小とづきし上を真俗二諦は法き畢命  
 と期として嗜へし心得と改むる相と云ふな  
 み申さぬ候と云ふあり是改の字の意と云ふ  
 かく解もてゆふが唯文義のみ辨へらるれ



と實際心地じつじつこころに會得あひとくせざれば画餅えがひとありてさら  
は益えきありコトニ今回改刻こんかいかいこくの報意ほういハ之これと實際じつじつ上うへに得て  
如是ごとくの心地こころに任まかせしめんと志こころ給たまふ思おも召よふれを  
門かど葉はする者ものハ勿論もちろん皈かへ仰まうする者もの其意そのいと志こころらむは  
何なに多おほぶらうす刺さし御製作ごせいさくの本意ほんいとうかがえを  
心中こころ所得しよとくの安心あんしんの旨こころと述のる文章ぶんしょうをまじむ各自各自の  
心こころよかく財さいへかく伸のて毛髮もうはつも片心ぺんしんに違ちがふ知しあ  
くば是これは真宗しんそうの門徒もんたたるべしさきハこれと安やす  
心の鑑かたといすき也此鏡このかがみは向むかてまふときハそ  
むきこること多おほかまき捨すよと教かへ給たまふ雜行ざぎやうとさ

まであうくハ及およぶと雜縁ざぎやんよふきてハ他の経きやう  
とよみ他の佛ぶつと礼らいすも後世ごせの為ための事ことハ思おも  
ハ是これ則すなは雜行ざぎやう也香華かうかとさけらるも往生じやうじやうの因いんと  
ハ思おもをぬと御恩ごおん報謝ほうしゃとハたも一を願力がんりきと信しんせ  
よとすめ給たまふ我罪障わがざいじやうの深重しんじゆうとうきかじ或  
と信心しんしん歡喜くわんぎと聞きてハ人ひととあまほと喜よろこぶとも我われ  
とさやどハ喜よろこぶとも我われと思人おもひとと見て疑慮ぎりよと生な  
往生じやうじやう変定へんじやうと行者ぎやうじやの方かたハあき者と己おのの心こころと  
推付おして之これと意樂いらくと己おのと運うびま一あひ付あひ  
て往生じやうじやうとたりの之これハ自力じりきの妄情まうじやう計度けいどとて他た



かといふ肝心の目的とすつ知れく自力の  
階るこれら皆定示され旨と背き申して居  
ころなり是の閑山見真大師とすめ次第御相  
承の旨と背ききるあまきば今この如くそれと  
改悔せしめ給ふあり己後ハ心と改めて他力の  
御回向と信せらる第一と専修正行の名号六  
字と私への賜と戴きうらあく報謝の称名と喜  
ひ諸神ハ和光同塵の利益と垂て今出離の要法  
ゆ逢えしめ給ひ諸佛菩薩と同勸同證の勸と施  
して超世の悲願小飯せしめ給ふ更あまきハ必也

疎か思はず廣大の恩遇ある事と思ふべし世間  
に在るハ王法仁義と奉と宗とする更と忘せ  
念佛往生と樹下石上の行法はゆはず殊に真  
宗の教化と本在家往生の先達よりして愛妻愛子  
の中は修まる如の教法あまき今日世は處  
王法と奉とせざれむ何とまで日と送るべき士  
農工商職業小怠らむ何とめて糊口せん老き  
ハ常ハ一家の法儀と勸免時ハ滋養の養生と  
ハ少きハ学校ハ出て文藝と進マ暇日ハを教法  
と聞て心魂と定む兄弟夫婦眷屬等互に勧め合



誠め合現未二世の安穩を得る是真宗の規則也  
かくの如く世出世より外は王法の護と  
蒙り肉は佛法の維持と得て表は仁義を行ひ  
裏は信心と財へ現在より樂地に住する是と今  
善知識の示す背らざる嗜ある真宗の改悔者とは  
申也

御恩有りごとや南无阿弥陀  
此一段と結文あり而して領解述意の結文あり  
御恩有りごとやの御ことをハ人道の大旨  
て恒常真宗の攀止にあり世出世も互りて

巧妙の結文と云べし凡そ人と名くる度と恩と  
受て恩とある故よ人と云恩とある者も畜  
生とよと竜樹菩薩もの給へり實は報恩も人道  
の大旨なり而も念佛者の第一とせざる慶佛恩  
と知て佛恩と報し國恩と知て國恩と報し父母  
の恩と知て父母の恩と報し衆生の恩と知て衆  
生の恩は報ふ志くれは報恩の廣き四海兄弟而  
已ならず世々生々の内生と生々る者何きあ  
縁と結むざる是等の恩報盡の期を得生の後還  
相の回向に依て大悲満足せしむる是亦他非也



第廿二の願の利益なれば他力の志うむる  
こころ終固て今結皈するを南无阿弥陀佛の外  
あり南无阿弥陀佛

明治十三年九月廿日出版届  
同十五年十月 刺成

真福寺住職  
註解兼出版人 劉貞諒

愛知縣尾張國知多郡  
常滑村百六十三番地

定價貳拾錢



